
二人の短編集

Asu

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

二人の短編集

【Nコード】

N7302Y

【作者名】

A s u

【あらすじ】

コ哀、新志の短編集。

昼休み（前書き）

ギターーーーー短編集（＞＜＊）ノ~~~~~
とまあ調子に乗っているAsuです。

昼休み

ある昼休みのコトだった。哀は歩美と喋っていると、隣のクラスの
No. 1にもてる有川優に呼び出された。

優「あの、灰原さん。僕と付き合ってもらえませんか？」

哀「いや。」

哀は失礼ながら、速攻で告白を断った。当たり前だ、自分には江戸
川君がいる。小さくなった頃からもう、5年がたった。その間、ず
っと想ってきたのだ。

哀「それじゃ。」

そのまま、灰原は去っていった。

あの後、少年探偵団のグループで帰っていた。哀はコナンの横顔を
ジーーーーーっと見つめていた。そして小さくため息ついた。

哀「素直になれたらね。」

この気持ち(前書き)

コナン目線です(〃〃*)ノ
~~~~~

## この気持ち

コナン「なあ、灰原あ。」

哀「いや。」

コナン「何もいってねえし。」

哀「どうせ、昼飯作ってー。とでも言うんでしょ。」

コナン「…正解。」

ある日の昼下がり。灰原はいつもの様に何でも俺の事を見透かしてくる。

しばらく俺が見つめていると、灰原はため息をつきながら立ち上がった。

やっぱり灰原は優しい。いつからだっけ、こんな灰原を好きになったのは。守りたくなったのは。

初めて泣かれた時にあった気持ちがそのまま大きくなって今に至る。気づいたのは、組織を倒して解毒剤が出来た時だった。

コナン「なあ、灰原あ。」

哀「何？ 私今忙しいんだけど。」

コナン「…なんでもない。」

この気持ちが伝えられたら。どんなに楽か。  
少し勇気を振り絞って、伝えてみっかな。

今度。



## 彼女の瞳（二）（前書き）

何か前後編になりました（ $T \wedge T$ ）  
すみません（ノ―・，）

## 彼女の瞳（二）

組織を倒して解毒剤を飲み、俺は工藤新一に戻った。灰原も宮野志保に戻って、味わったことのない高校生活を楽しんで（？）いる。

解毒剤を飲んだ後に蘭に告白した。俺がコナンだったってことも話した。

その事を宮野に話すと、「よかったわね。」と言ってくれた。しかしその日からだった。宮野がどこもなく悲しそうな瞳をし始めたのは。

蘭「ねえねえ新一！！！！今度トロピカルランド行こうよ♪」

新一「ああ。」

俺が蘭と話しているとまただ。またアイツが悲しそうな瞳をしている。

そんなアイツを見てると胸が苦しくなる。俺には、蘭がいるのに：どうかしてる。宮野の事が気になるなんて。

新一「なあ、宮野。」

志保「何よ。」

新一「おめえ何でそんなに悲しそうな目えしてんだ？」

志保「貴方には関係ないわ。」

喋りかけても、ほら。悲しそうな瞳をしている。そんな悲しそうな瞳すんなよ。

あの目をしている宮野を見ると、何か守りたくなる。蘭には抱か

ない感情が沸き上がってくる。

ああ。何でか分かったかも。俺、宮野の事が好きなんだ。

彼女の瞳（二）（前書き）

続きます／（＜＿＞）／

## 彼女の瞳（二）

俺が宮野を好きと気づいた日から、二日後、俺は蘭を呼び出した。

蘭「新一…？話って？」

新一「蘭、別れてくれ。」

蘭「！」

新一「他に守りたいやつが出来たんだ。いきなり、悪りい。」

蘭「新一…。その人、志保さんでしょ？分かるよ、なんとなく。」

新一「ああ。」

蘭「仕方ないね…。新一が志保さんを好きなら。」

蘭はやっぱり優しい。俺のこと、ちゃんと分かってくれてる。

蘭「志保さんの所、いかないでいいの？」

新一「ありがとう、蘭。」

それだけ言って、俺は走り出した。宮野のもとへと。

走って走って走って走って走って走って走って走って走って宮野を見つけた。彼女を見るだけで、胸がきゅんきゅんする。俺はどっかの少女漫画のヒロインか？

新一「宮野！！！」

志保「何よ。うるさいわね。」

新一「俺、宮野の事が好きだ！！！」

言った。すげえ勇気が必要だったけど。

志保「蘭さんは？」

新一「ふった。」

志保「はあ？」

新一「俺はおめえが好きだ。」

志保「私はそうじゃなきゃ困るけどね？」

新一「はあ？」

志保「あたし、貴方のこと、灰原哀の頃から好きだったもの。」

今…何て言った……………?????

み、宮野が俺のこと、好きって??? 顔が熱い。きっと俺、今顔真っ赤だ。

真っ赤な顔のまま、俺は宮野を抱きしめた。

彼女の瞳（二）（後書き）

何か…ビミョー。

駄文で、すみません（ノ・、）



## サヨナラ（前書き）

何かアカン。っていうか雛花さんのと何か似てます。すみません（  
ノ・、'）  
パクった訳じゃないんです（泣）

## サヨナラ

暗い部屋の中で涙を流している青年と静かに笑っている女性がいた。そして青年の手の中には銃———。矛先は女性のこめかみだった。

いつもの様に博士の家でくつろいでいた新一は志保に甘えていた。

新一「志保お。」

志保「そういえば貴方、今日どうするの？嫌って言うても止まってくんではうけど。」

新一「当たり前。」

志保「じゃあ、着替えとって来ておきなさい。」

新一「めんどい…。」

志保「別にいいのよ？私のとびっきり女の子らしい服を貴方に着させても。」

新一「いってまいります。」

新一は即座に立ち上がって着替えを取りに行った。

新一が自分の部屋に来ると、人の気配を感じて後ろを振り返る。そこには蘭がいた。

新一「おう。蘭どうした？」

実は新一は先日蘭を振ったばかりでそれ以来喋っていなかった。

蘭「新一に復讐しにきたの。と言っても新一を殺す訳じゃないよ？  
新一の最愛の人を殺しに行くの。」

蘭は淡々と話していった。これが幼なじみだった蘭…？新一には信じられなかった。

新一「蘭…？」

蘭「でもそれじゃあつまんないよね？だから新一、志保さんを殺してきて。」

新一「無理だ。」

蘭「可哀想に。子どもたちと博士の命を無駄にするんだ？」

新一「…！」

蘭「はい、拳銃。子どもたちと博士、守ってあげなよ…？」

そのまま蘭は出ていった。俺は脱力していた。志保を殺せだど？無理だ。しかし子どもたちと博士も見過ごせない。やっぱり志保を殺さなければならぬのか。

新一は重い足取りで博士の家に戻った。

志保「遅かったじゃない。何かあったの？」

新一「子どもたちと博士が人質にされた。」

志保「え…。」

新一「要求に答えないとなくなかった。」

志保「要求は？」

新一「俺が…志保を殺さなければならぬ。」

志保は一瞬驚きの色を見せたが、すぐに静かに笑った。

志保「それなら早く殺しなさい。」

その言葉で新一は泣きながら銃口を志保のこめかみに当てた。そして――

バン

銃声が部屋の中に響き渡った。その音と同時に志保は崩れ落ちた。

志保「サヨ…ナラ……。 」

志保はその言葉を発した後、帰らぬ人となった。

新一「志保おおおおお!!!」

その後、新一はずっと泣いていた。人質が解放されたと知っても、蘭が捕まったと知っても。新一はずっと泣いていた。

サヨナラ（後書き）

新一…可哀想。

愛しい君へ（前書き）

コナンから哀ちゃんへラブレターです（笑）  
コナン君、ヘタレーーーーー！

## 愛しい君へ

灰原へ。

おめえ、俺の気持ち知らねえだろう？  
って言っても俺も最近まで気づかなかったんだけどさ。

俺、前まで蘭が好きだと思いこんでた。でも違ったんだ。  
俺は、灰原が好きだ。

俺、おめえのこと、守ってやつから。  
だから、逃げんじゃねえぞ。

---

コナン「俺はバカか。」

コナンは書いてて馬鹿馬鹿しくなった。  
最近、灰原がやたらキレイになってきて、置いていかれそうだ。それで、我慢が出来なくなってきた、告白という結論になったんだ。

やっぱり手紙より、直接言うか。





愛しい君へ（後書き）

うーーーーーわーーーーー短いつ（＊  
ー＊

## **k i s s (前書き)**

授業中に適当に書いたやつです。  
ちょっと見苦しいかも…。

## k i s s

コナン「灰原…。」

哀「ごめんなさい。本当に…ごめんなさい…。」

彼女は泣いて謝ってくる。何度も何度も。別に、謝らなくていいのに。解毒剤なんて必要ないんだ。灰原の隣にさえいられば。

今日、灰原に呼び出され、解毒剤が出来ない体質になってしまったと告げられた。もちろん俺は少しショックを受けた。けど、少しだ。

コナン「いいよ、灰原。」

哀「ホントに…ごめんなさい…。」

コナン「なあ、俺、別に元に戻らなくてもいいんだよ。」

哀「えっ?」

灰原は涙で濡らした顔をあげた。その顔はとてもキレイだった。

コナン「俺は元に戻れないより、灰原が隣にいねえ方が辛えかな。」

哀「それってどういう…」

コナン「こういうことだよ。」

俺は彼女の唇に自分の唇を重ねた。灰原の顔はみるみる赤くなっていく。

コナン「俺はおめえが好きだ。」

哀「う……そ。」

コナン「本当だよ。」

哀「うそっ！そんなの気の迷いよ。だいたい、蘭さんはどうしたのよ？」

やっぱり、そう思うか。

コナン「俺は、蘭のこと好きだった。もう過去形だよ。」

哀「あんなに元に戻りたがってたのに……。――私が、私の存在が、貴方達二人を引き離してしまったのね……。」

悲しそうな瞳をする灰原。なんで……。何でそうネガティブに考えるんだよ。俺は……もう灰原しか考えられねえのに。

コナン「バーロー。おめえのせいじゃねえよ。」

哀「貴方はどこまでも優しいのね……。でも私、貴方のそういうところ、嫌いじゃ無いわよ？」

コナン「逆に好きだろ。」

哀「貴方は自惚れ屋なの？でも、そうかもね？私、貴方のこと、大好きだから。」

は……？

コナン「マジで……？」

哀「二回も言わないわよ。」

嬉しすぎて、俺は灰原を抱きしめた。

哀「えっ、ちょっと……！！」

声は抵抗しているが、満更でも無さそうだ。その後、どちらともな

く、二回目のキスをした。

## **k i s s (後書き)**

誤字の指摘、お願いいたします／(＜|＞)(＜|＞)／

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n7302y/>

---

二人の短編集

2011年12月5日18時53分発行